

ホウレンソウべと病

1 病原菌の特徴

- (1)ホウレンソウのべと病は、糸状菌(カビ)が原因で発生する病害です。
- (2)本病の伝染源は、主に被害株や前作の発病残さです。被害株や発病残さに菌糸や孢子(卵孢子)として菌が生存し、気象条件等が整うと孢子(分生孢子)が作られて、この孢子が風などにより飛散して葉に到達し感染・発病します。また、種子に付着した孢子(卵孢子)によって伝染することも知られています。
- (3)本病菌には、ホウレンソウの品種に対して病原性の異なる種類(レース)があります。そこで、その地域で発生しているレースに抵抗性を持つ品種を栽培すると、本病には感染しないため、抵抗性品種が導入されています。ところが、これら抵抗性品種を侵す新しいレースが次々と出現するため、それまで本病に抵抗性をもつと思われていた品種が発病する事例が数多く認められています。

2 被害の様子

- (1)本病は葉に発生します。はじめ下葉の表面に境目が不明瞭な黄色い斑点が現れます。
- (2)この斑点は次第に拡大して、淡黄色～淡緑色の不整形の病斑となり、葉の裏側には灰色でピロード状のカビが見られるようになります。
- (3)さらに、症状が進むと病斑部を中心に葉が奇形となったり、病斑が融合して葉の大部分が変色して次第に枯れます。



写真1 葉表からみた斑点症状



写真2 葉裏に発生したピロード上のカビ



写真3 病斑が融合した発病

3 発生について

(1)本菌の孢子(分生孢子)が作られる温度は5~20℃で平均気温が8~18℃の時に発生が多くなります。このため、露地栽培では主に春と秋に発生します。

(2)本病は多湿条件ほど孢子(分生孢子)の形成及び発芽が促進されるため、降雨や曇天が多いと発病が多くなります。

(3)密植や多肥栽培等により軟弱かつ過繁茂な生育の状態では発病が多くなります。べと病は比較的冷涼な気候と多湿条件で発生が助長され、晩秋と春に降雨や曇天が続くと、発生が急激に蔓延します。

(4)発生経過は図1のとおりで、例年、露地栽培では10月~12月と3月~5月に発病が多くなります。感染した越冬株では冬期間は一時的に進展が見られなくなりますが、気温が上昇する春先から再び症状が現れます。

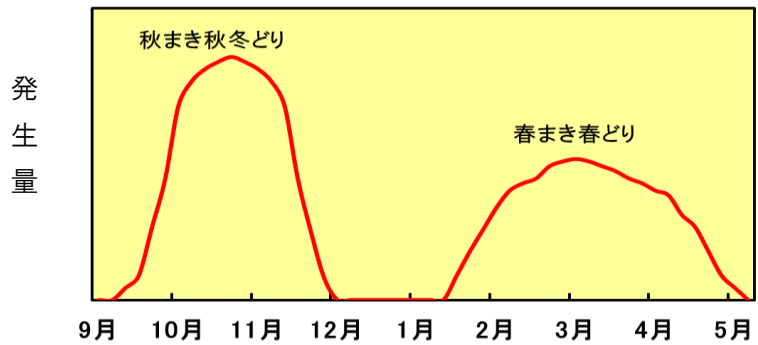


図1 ホウレンソウべと病の発生消長

4 防除時期と防除方法

(1)防除の目安

本病は、発生後では防除が難しいので、発病の恐れのある時期やほ場に作付けする場合は、耕種的な防除対策を徹底するとともに予防的に薬剤防除を行います。もし、発病が認められた場合には、発生初期に薬剤による防除を徹底する必要があります。

(2)耕種的防除

ア 発生ほ場では、収穫後の残さをほ場外に搬出し、処分しましょう。

イ 品種選定に当たっては、レース抵抗性に留意してください。ただし、新しいレースが現れると抵抗性品種でも発病するため、発病には十分に注意を払いましょう。

ウ 多湿条件を回避するため、マルチ栽培を行いましょう。

エ 厚播きや多肥栽培を避け、軟弱かつ過繁茂な生育にならないように注意しましょう。

オ 発病が認められたら、直ちに発病株を抜き取り、処分しましょう。

(3)薬剤防除

ア 登録薬剤を、播種時に土壌施用するか、発生前から発生初期に茎葉に散布しましょう。なお、散布する場合には、葉裏にも十分かかるように留意しましょう。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国 埼玉県